

## 不穏な春／社会転換の道筋 示すとき

谷口吉光（秋田県立大学）

大型連休の最終日、朝起きて肌寒く感じたが、「まさか5月にストーブでもないな」と思ってそのままにしていたら、突然せきが止まらなくなってしまった。あわてて毛布をかぶって横になった。

無理もない。4月終わりから異常な暑さが続いていた。横手市で30度を超える真夏日になった時には怖ささえ感じた。これも地球温暖化のせいなのか。米や野菜は大丈夫だろうか。

それが5月4日の午後から低気圧が通過し、私の家の周りにまとまった雨が降った。これで暑さも一段落かと思ったら、翌朝には秋の初めのような冷たい風が吹き始めた。一度暑さに慣れた身体には「冷たい」と感じてしまう。今朝のせきもそんな身体の防衛反応だったのだろうか。

しかし、この連休は人間社会にとっても大きな事件が多かった。特に驚いたのは安倍首相の米議会での演説だ。次のような勇ましい発言をしている。

「日本はいま『クォンタム・リープ（量子的飛躍）』のさなかにあります。親愛なる上院下院議員の皆様、どうぞ日本へ来て、改革の精神と速度を取り戻した新しい日本を見てください。日本はどんな改革からも逃げません。ただ前だけを見て構造改革を進める」

人口流出が止まらず、子どもの数は減り、「地方消滅」といううわさにおびえ、原発被害地域の復興のめども立たず、米価暴落の下でかろうじて春の作付けをしている東北地方の現状を見る時、どこに「量子的飛躍」や「どんな改革からも逃げない日本」があるというのか。安倍首相は自分の見たい現実だけを見て、見たくない現実は見なくてもよいと考えているようだ。

そんな政治状況に歯止めをかけなければならないと思う人は多いと思うが、最近の国政・地方選挙は（沖縄県知事選挙などを除けば）軒並み「史上最低の投票率の下での自民党圧勝」というパターンを続けている。「対案を示せない野党が悪い」という意見にも一理あるが、政党や政治家だけに責任を押しつけて済む段階はもう終わったのではないか。

私たちが取り組むべき最大の課題は大量生産大量消費社会から持続可能な社会へどう転換するか、その道筋をつけることだと思う。その転換を進めるためにどんな課題があり、それをどう克服していくべきかというアジェンダ（行動計画）を市町村・都道府県ごとに作成する時期が来ている。過去に経験のない難題だが、それに挑戦するリーダーが地域から生まれてくることを期待したい。

不穏な春の気配を身体で感じながらこんなことを考えた。これからも本コラムを通して秋田の未来のために語っていきたい。

（朝日新聞「あきたを語ろう」 2015年5月13日掲載分に加筆・修正した）